

## 境界を越えて戦争の悲劇を未来へ語る人

中津攸子著『戦跡巡礼』に寄せて

1

人と人が深く出会う瞬間には、互いが敬愛する人物が引き合わず、眼に見えない力が存在するのではないか。そのような出会いがあると、私は生きることへの感謝と豊かさを実感する。中津攸子さんとの出会いも不思議な巡り合わせだった。今年の三月十日の朝八時五十分NHK総合テレビ（関東・甲信越と九州・沖縄）に、コールサック社の刊行した『大空襲三一〇人詩集』が五分ほど紹介され、私と若手の詩人亜久津歩さんがインタビュアーを受けた。その日あまりテレビを見ない中津さんはスイッチを入れて、その放送を偶然に見たそう。その時にいま中津さんが執筆している戦場跡を旅した俳句とエッセイをコールサック社から出版したいと直感されたという。

放送日から数日後に電話があり、私と直接に話すことになった。話を伺っていて驚いたことに、私が敬愛する人物の四名と中津さんが親しく交流されていた。中津さんは市川に暮し、歴史小説や古代の歴史書など約六十冊の著作をもつ作家だった。私は名前をお聞きしてすぐに、市川で詩人の宗左近

さんが二ヶ月ごとに開催していた「市川縄文塾」で、時々お顔を見かけていた中津さんだと分かった。会では直接にお話をしたことはなかった。中津さんは私のことを覚えていなかった。しかしよく私が宗左近さんの脇に座っていて、宗左近さんの深遠で宇宙的な哲学・文化論は難解だったこともあり、僭越だが哲学を専攻していたので、私が時々補足・解説させてもらっていた鈴木ですと言おうと思いついてくれた。それから私が通った市川学園高校の恩師で担任教師であった能村登四郎や国語教師の福永耕一、そして学園の創設者の古賀米吉校長の三人とも深い交流をしていて、いまも市川学園の評議員をされていることが分かった。能村登四郎は俳誌「沖」の創刊者で、亡くなるまで二十年間も読売新聞の選者を続けていた高名な俳人だった。私が初めて出会った強烈な詩的精神を持った文学者は、能村登四郎と「沖」の俊英で激しく純粹な感覚を残した福永耕一だった。また古賀米吉校長は、私が生徒会長として生徒側の考えを伝えて論争を挑んだ時に、子供だからといってはぐらかすことなく、自分の生き方や実践的な教育論を通して説得力ある反論をしてきた真の教育者であった。中津さんと私は、これら尊敬すべき四人の人物の話を始めると、時間を忘れて話し込んでしまった。

2

ところで、中津さんはコールサック社の刊行した『大空襲

三一〇人詩集』になぜ関心を持ったのか。二年前の二〇〇七年に広島・長崎の『原爆詩一八一人集』が刊行されたが、その編集時に次は『大空襲詩集』も編集刊行することが構想されていた。国内の大空襲・空爆の死者は少なくとも五十万人はいると言われている。原爆での死者が仮に二十万人とすると、残りの死者二十八万人は百八十都市への空爆の犠牲者だ。世界で初めての空襲は一九一一年にドイツがトルコへ空襲したことからはまった。詩として記されているのは一九三七年からで、その年から二〇〇九年までの世界中の大空襲・空爆下の悲劇を詩にした三百十人の詩人の三六〇篇を集めたのがこの詩選集だった。日本軍は一九三七年に南京・上海に爆撃し、一九三八年には重慶にも爆撃を開始した。それらの都市には中国の詩人艾青、阿や市川にも縁の深い郭沫若がいて日本の空襲を告発する詩を書き記していたのだ。また一九四〇年のロンドン大空襲下にはノーベル賞詩人であるデイルン・トマスが四篇の詩で老人・子供など民間人の悲劇を書き残していた。また日本軍の七三一部隊が中国で行ったペスト菌での空爆、真珠湾攻撃や風船爆弾などの一章「海外・戦中」の詩篇から始まり、二章「東京」、三章「関東」、四章「北海道・東北」、五章「中部」、六章「関西」、七章「中国・四国」、八章

「九州・沖縄」などでは米軍が戦争末期に百八十都市に空爆を実行したといわれているが、そのうちの八十都市に空爆詩が寄せられている。二章「東京」は東京大空襲の五十もの詩篇

で冒頭には宗左近の「炎える母」がおかれている。九章「海外・戦後」では朝鮮戦争からアフガン・パレスチナのガザの爆撃についての詩篇が集められていて、二十世紀・二十一世紀の人類の戦争の悲劇、報復の連鎖が詩を通して書き記されている。中津さんはこの詩選集の試みを今までに存在しなかった画期的なものとして受け止めて下さり、そのような本を刊行した出版社に自分の本を任せたいと言われた。

著書の『翔天の詩——銚子特攻隊員上野少尉の御霊に捧ぐ』のあとがきによると、中津さんは、戦争末期に銚子沖で空襲を終えて帰還するB29を追いかけて、体当たりしていった特攻機とB29の二機が墜落して行ったのを見たという。そんな戦争の悲劇を目の当たりにして、戦争で死んでいった人々のことを書き記さなければならぬと使命感を抱いていたのだと思われる。今までは歴史上の人物を通して戦争によって踏みじられた民衆の思いを中津さんは想像力を駆使して小説などに語らせていた。今度の著書では、中津さんも子供時代にその時代を生きた十五年戦争の犠牲者たちを慰霊するために、戦場跡を訪ねてその犠牲者たちの魂と対話するかのようになり、リアリズムに徹してこの書が記されている。中津さんは同時代の亡くなった人々の記憶を少しでも後世に残そうと考えたのだろうか。

3

中津さんから原稿を見せていただいた時に、私は俳句をタイトルにした散文集でありながら、全体を通して根底に二十世紀の戦争被害者たちを慰霊する深い鎮魂を感じた。まだ厳密に編集されていない原稿の束の前に、私は中津さんとじっくり相談しながら、全体を一章「大陸・巡礼」、二章「太平洋諸島・巡礼」、三章「東京・広島・長崎・巡礼」、四章「特攻兵士・巡礼」、五章「沖繩・巡礼」、六章「戦後・巡礼」の六章に分けた。各編のタイトルは俳句そのものとし、本のタイトルは『戦跡巡礼』とした。私は書き尽くしていないところがあれば、じっくり修正し、新しい戦跡の原稿追加もされて下さいと提案した。それに応えて中津さんはいくつもの重要な戦跡を追加取材して最終原稿を練り上げていった。私は中津さんが戦争の悲劇を担った人々を心から慰霊している純粹さと執念のような使命感を感じていた。

『戦跡巡礼』を少し解説させていただく。一章「大陸・巡礼」十五編の冒頭一編には「秋天の悲しきまでに白き雲」というタイトル句がある。国民学校三年生だった中津さんが授業中に歌われた「ここはお国を何百里 離れて遠き満州の」という歌詞の中で、銃に撃たれた兵士は軍医や看護兵に助けられたのかと質問したそうだ。先生は助けに來たけれどすでに死んでいたので、生きている兵士を優先的に助けたのだと語ったそうだ。戦後になり銃で撃たれたほとんどの兵士は、負け戦では捨てて置かれて死んでいったことを知った。そんな兵

士たちを偲び旧満州の地でこの句を詠んだという。一人の民衆の側に立ってその死を悼むという中津さんの姿勢がこの書を成立させていることが分かる。二編目の「二〇三高地さざんか揺らす風」では、日露戦争の二〇三高地の争奪戦で、五日間で日本軍は突撃命令により一万五千人が千名に減ったそうだ。そのような犠牲を出してロシア海軍基地旅順を奪い、やっと日露戦争に勝った。中津さんは「進め進めの無慈悲な号令」で戦死した兵士たちは靖国神社に祀られたが、果たしてその後の日本の進路にとって良かったのかという問いを投げかけている。「明治の狂乱といえる国家主義」への冷静な反省が記されて、兵士たちを純粹に悼むと同時に、日本の国家主義が兵隊の命を粗末にし続けてきたことを強く批判していることが感じられる。六編目の「西日照る七三二の部隊跡」でも、日本軍が中国大陸で犯した細菌・毒ガス兵器の戦争犯罪を見詰めて、その中心人物であった石井四郎中将や多くの部員が米軍への情報提供によって戦犯を免れた事実を記している。そしてシベリヤ抑留者やB級・C級の戦犯で処刑された人々との比較をして戦争責任の問題点を指摘している。

二章「太平洋諸島・巡礼」九編では、真珠湾、サイパン島、フィリピン、インドネシアなどの悲劇が記されている。サイパン島では「バンザイ岬海上に湧く雲の峰」と詠んだ。バンザイ岬では三千人もの人々が絶壁から飛び降りたという。軍人も含め三万五千人が亡くなったが、多くの自決者を生み出した人々との比較をして戦争責任の問題点を指摘している。

したものが何であつたかを中津さんは正視しようとしている。

三章「東京・広島・長崎・巡礼」七編では、グラマンの機銃掃射体験、銚子空襲、東京大空襲、広島・長崎の原爆などについて記されている。中津さんは茨城の波崎町に暮らしていて防空壕近くでグラマンが低空飛行をして機銃掃射してきた体験をされたり、利根川の対岸の銚子が空襲で真っ赤に燃えているのを目撃している。「亡き父の真意に気付く今日の花」と詠んだ東京大空襲のことについては、中津さんが父母と兄弟と一緒に山梨に疎開するために銚子から小岩まで電車を乗り継ぎ、小岩から飯田橋まで歩いて東京の下町の焼け野原の惨状を見た経験語っている。父はこの「戦争の悲惨さを子供たちに見せておきたかった」のではないかと、後から中津さんは気付いた。国防団の人々が銃で黒焦げの死体を無造作にトラックの荷台に投げ込み走り去っていく光景や、公園に埋められた多くの死体などを見た体験が、この書を書かせた無意識の原動力になったのだらうと思われる。また中津さんの「九十八歳で逝った母は息を引き取る半年前まで折鶴を折っていた」という。中津さんは父母が身をもって伝えてくれた平和への思いに深い感謝を捧げながらこの章を書き上げたに違いない。

四章「特攻兵士・巡礼」五編では、中津さんが目撃した銚子沖でのB29への体当たり特攻や、知覧特攻平和会館、指宿特攻兵士の碑、人間魚雷回天の死者を祀る大分の回天神社

霞ヶ浦特攻部隊の跡地などに向いて極限を生きた特攻兵士たちを慰霊している。「天炎えて特攻の碑の影深し」に込められた兵士たちの生き得なかつた無念を想起することが、平和を守る原点であると中津さんは語っている。

五章「沖繩・巡礼」十編では、日米の軍人と民間人合わせて二十四万人以上が亡くなったといわれる、その激戦地を訪ねている。その中でも「流れ星いくつ流るる喜屋武岬」は心に沁みる句だ。喜屋武岬は、サイパン島のバンザイ岬と同様に、米軍に追い詰められた住民が沖繩本島最南端のこの場所から次々と飛び降りていったという。中津さんは「二十世紀は狂気の時代」だといひ、宗左近の「二十世紀戦死者一億七千万牡丹雪」の句を引用する。そして宗左近の二十世紀の憂いが二十一世紀まで続かせないためにも、喜屋武岬の悲劇を語り継がなければいけないと語っているのだ。中津さんは、私が『大空襲三二〇人詩集』で宗左近の詩を通して平和の哲学を後世に残そうとしたように、この『戦跡巡礼』で宗左近の句を通して戦争の記憶を多くの人々に残そうとしたのだらう。

最後の第六章「戦後・巡礼」十六編では、中津さんの頭を撫でて戦場に行った兵士や軍馬の死を偲び、呉の海軍兵学校跡や戦艦大和を建造した海軍工廠、戦争中の劣悪な食糧事情の回想や、戦争未亡人だった先輩教師のこと、市川学園創設者の古賀米吉校長のこと、日中の架け橋になった郭沫若のことなどが記されている。平和を維持するとは、戦争の悲惨な

記憶を忘却しないように、語り伝え書き伝えて行くことを実践するのが大事だというのが中津さんのメッセージだろう。古賀米吉校長のことを語った「誰が魂と知らねど今朝の白桔梗」は、校長の著書『私学教育に明け暮れる』から国家を超えた友愛の話が引用されていた。南の島で日米の兵隊が戦い傷ついた米兵は、撃とうした日本兵に無意識にボイスカウトの挨拶をして気絶してしまった。眼が覚めると傷の手当がされて、手紙には自分は日本のボイスカウトであったので君を殺すことが出来なかつた。幸運を祈ると書かれてあつたという。生き残つた米兵は戦後にその日本兵を探したがたぶん死亡していたからか発見できなかった。極限の狂気の場合であつても決して理性を失わなかつた日本兵がいたことは大きな救いだらう。私たちはどんな場合であつても、時代の狂気のせいにして自らを正当化してはならないと、最後に中津さんは古賀米吉校長の言葉に仮託し、戦死した「誰が魂」を決して忘れてはならないと自戒のように語っている。

本書の装丁画の花は諸葛菜だが、最後の編にその名の由来が記されてある。春先の三月に中津さんが恩師能村登四郎と歩いていた時にダイコンの花を見て、この花を諸葛菜と名付けたのは郭沫若です、と教えてくれたという。中津さんは、この花は不戦の誓いであり平和の象徴ですね、と郭沫若や能村登四郎とこれからも語り合っていくのだろう。私は中津さんと本書のジャンルを相談したが、句集、エッセイ、紀行文、

歴史書でもなくどれもしつくりこない。私が例えば松尾芭蕉の『奥の細道』のような境界を越えていく魂の書ですなという、中津さんは笑っておられた。現代のジャンルには納まりきれないからこそ、多くの戦争犠牲者たちの記憶がこの書に宿つて未来へ反復されると思うのだ。この『戦跡巡礼』が戦争の悲劇と平和の尊さを知るためのきつかけとなるように、戦争責任に関心を持つ大人たちはもちろんのこと、多くの若者や子供たちにも読んで欲しいと心から願っている。